

ASIAN AND MIDDLE EASTERN STUDIES TRIPOS Part IB

East Asian Studies

Wednesday 2 June 2010

09.00 – 12.00

J.5 MODERN JAPANESE TEXTS, 2

*Candidates should answer **both** sections.*

*Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** Section booklet.*

STATIONERY REQUIREMENTS

20 page Answer Book x 1

A Rough Work Pad

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed that you may do so by the Invigilator

SECTION A

1 Translate the following UNSEEN text into English: [40 marks]

■ 戦後日本の家族の寝方

(1) 三人家族の寝方

それでは、筆者自身がかかわった調査データを基に、「誰の隣に誰が寝るか」という視点から日本の家族の寝方について述べることにしよう。日本家族社会学会が行なった全国調査「戦後日本の家族の歩み」（二〇〇二年一月）の中で、対象者（三二歳から八一歳の女性五千人）に対して次のような質問を行った。

質問 最初のお子さんが小さいころ（三歳未満でまだ次のお子さんが生まれるま

question continues ...

え)、夫婦とお子さんは夜寝るときどのような配置で寝ていましたか。

- 1 三人とも一緒の部屋で、母親が真ん中に寝る
- 2 三人とも一緒の部屋で、子供が真ん中に寝る
- 3 母子が一緒の部屋で、父親は別室に寝る
- 4 夫婦が一緒の部屋で、子供は(一人で)別室に寝る
- 5 その他
- 6 わからない(忘れた)

家族の寝方を具体的に四つのタイプのいずれであるか尋ねたのは、これまでの研究で日本の家族(小さな子供がいる三人家族)の寝方はほぼこの四つのタイプで分類できることがわかっていいるからである。「1」のタイプを「M中央型」、「2」のタイプを「C中央型」、「3」のタイプを「F別室型」、「4」のタイプを「C別室型」とよぶ)とする(MはMother、CはChild、FはFatherの頭文字である)。

第一子が三歳未満で第二子がまだ生まれていない時期の寝方を尋ねたのは、第二子が生まれて四人家族になると寝方のパターンが複雑になってくるためであるが、たんにそれだけではなく、三人家族のときの寝方のパターンが第二子が生まれた後の寝方のパターンをかなりの程度規定することがやはりこれまでの研究からわかっているからである。

学会	academic association
未満	less than
配置	arrangement
分類	classification, grouping
規定	rules, regulations

Ōkubo Kōji, *Nichijō seikatsu no shakaigaku* (2008), 47-48.

(TURN OVER)

SECTION B

Answer TWO of the following three questions

2 Translate the following SEEN text into English: [30 marks]

(1) 指定席と優先席

ここまではどの座席に座るのも本人の自由（少なくとも明示された規則の水準では）ということ想定して、そこに働いている暗黙の規則について考察してきた。しかし、車内には誰が座るかについて明示された規則のある座席というものが二種類ある。指定席と優先席である。指定席はお金を払って座る権利（指定席券）を購入した特定個人だけがそこに座ることができる。一方、優先席というのは特定個人のためのものではなく、高齢者、妊婦、乳児を抱えた人、松葉杖をついている（足に怪我をしている、あるいは障害をもっている）人といった一群のカテゴリーに該

question continues ...

JRの優先席のマーク



現在の優先席の前身であるシルバー・シートが山の手線や中央線の車両に設置されたのは一九七三年九月十五日のことである。それから二十一年後、一九九七年四月九日にJR東日本はシルバー・シートを優先席と改名し、優先されるべき人間のカテゴリーを拡大した（他の交通機関も順次これに従った。「優先」であって「指定」ではないから、それ以外の人間が座ってはいけないわけではない。ただし、優先されるべき人間が現れたら、そうでない人間は席を立たなければならぬというのが優先席というものの一般的理解であろう。

当する人たちが優先的に（ただし独占的ではなく）座る座席であることが図柄によって示されている。

社会の全人口に占める老年人口（六十五歳以上）の割合が七%を越えると、その社会は高齢化が始まったとみる。わが国では一九七〇年に七%を越えた。高度成長の終わりは同時に高齢化の始まりでもあった。

Ōkubo Kōji, *Nichijō seikatsu no shakaigaku* (2008), pp. 64-65.

(TURN OVER)

3 Translate the following SEEN text into English: [30 marks]

彼はそれから、その瓢が離せなくなった。学校へも持って行くようになった。しまいには時間中でも机の下でそれを磨いていることがあった。それを受持の教員が見つけた。修身の時間だっただけに教員は一層怒った。

よそから来ている教員にはこの土地の人間が瓢箪などに興味を持つことが全体気に食わなかったのである。この教員は武士道を言うことの好きな男で、雲右衛門が来れば、いつもは通りぬけるさえ恐れている新地の芝居小屋に四日の興行を三日聴きに行くくらいだから、生徒が運動場でそれを唄うことにはそれほど怒らなかつたが、清兵衛の瓢箪では声を震わして怒つたのである。「到底将来見込みのある人間ではない」こんなことまで言った。そしてそのたんせいを凝らした瓢箪はその場で取り上げられてしまった。清兵衛は泣けもしなかつた。

彼は青い顔をして家へ帰ると炬燵に入ってたただぼんやりとしていた。

そこに本包みを抱えた教員が彼の父を訪ねてやって来た。清兵衛の父は仕事へ出て留守だった。

「こういうことは全体家庭で取り締まっていたらだくべきで

……」教員はこんなことをいって清兵衛の母に食ってかかった。母はただただ恐縮していた。

清兵衛はその教員の執念深さが急に恐ろしくなつて、唇を震わしながら部屋の間で小さくなつていった。教員のすぐ後ろの柱には手入れのできた瓢箪がたくさん下げた。今気がつくか今気がつくかと清兵衛はヒヤヒヤしていた。

さんざん叱言を並べた後、教員はとうとうその瓢箪には気がつかずに帰って行った。清兵衛はほっと息をついた。清兵衛の母は泣き出した。そしてダラダラと愚痴っぽい叱言を言いだした。

間もなく清兵衛の父は仕事場から帰って来た。で、その話を聞くと、急に側にいた清兵衛を捕えてさんざんに撲りつけた。清兵衛はここでも「将来とても見込みのない奴だ」と言われた。「もう貴様のような奴は出て行け」と言われた。

馬車の中にはお婆さんが五人居眠りしながら、この冬は蜜柑が豊年だという話をしていた。馬は海の鷗を追うかのように尻尾を振り振り走った。

馭者の勘三は馬を大変愛している。その上、八人乗りの馬車を持っているのは、この街道で勘三一人だ。また彼はいつも自分の馬車を街道の馬車のうちで一番きれいにしておくほどの神経質だ。坂道へさしかかると彼は馬のために馭者台からひらりと下りてやる。このひらりと下りてひらりと乗る身ぶりがいかにも愉快であることを、内心得意に思っている。また彼は馭者台に坐っていることも馬車の揺れ具合で、子供が馬車のうしろにぶら下ったことを感づけるので、ひらりと身軽に飛び下りて子供の頭へこつんと拳骨を食らわせる。だから街道の子供たちは勘三の馬車に一番目をつけているが、また一番恐れている。

ところが今日は、どうしても子供が捕まらないのだ。

つまり、猿のように馬車のうしろにぶら下っている現行犯を取り押えることが出来ないのだ。いつもなら、彼はひらりと猫のように飛び下りて馬車をやり過し、知らずにぶら下っている子供の頭へこつんと拳骨を食らわせて、得意気に言うのだ。

「間抜けめ。」

彼はまた馭者台を飛び下りてみた。これで三度目だ。十二三の少女が頬を真赤に上気させてすたすた歩いている。肩で刻むように息をしながら眼がきらきら光っている。しかし彼女は桃色の洋服を着ている。靴下が足首のあたりまでずり落ちてしまっている。そして靴を履いていない。勘三がじっと少女を睨みつける。彼女は横の海に目をそらして、たったたつと馬車を追って来る。

「チェッ！」

勘三は舌打ちして馭者台に帰った。ついぞ見慣れない高貴に美しい少女は海岸の別荘にでも来ているのだろうと思つて勘三は少し遠慮していたのだが、三度も飛び下りてもつかまらないから腹が立ったのだ。もう一里もこの少女は馬車にぶら下って来ているのだ。それがいまいまいましいばかりに勘三は大変愛する馬を鞭打ってさえ走ったのだ。